

エルンスト・ユンガー『労働者』における「別の信仰」

—— 戦士と信仰者の共同体 ——

川 野 正 嗣

序. 問題の所在

第一次世界大戦は、機械技術の破壊的な力を人間に突きつけ、従来の精神的な基盤を破壊した一方で、それを契機とする「新しい人間」の出現を人々に予感させた。「新しい人間」(der Neue Mensch)とは、元来、キリスト教における救世主を指す言葉であったが、近代以降は、ニーチェの超人思想を境に変貌をとげ、諸価値の破壊と創造を行う人間像として、とりわけ第一次世界大戦後のドイツ語圏においては、芸術や政治などの多岐にわたる領域で熱狂的に受容された。そして「新しい人間」が世界大戦と結びつくことで、それにより具体的で、また政治的な姿が与えられたのである¹⁾。開戦初年の1914年11月、ゲオルク・ジンメルはシュトラースブルクにおいて『ドイツの内的変化』(Deutschlands innere Wandlung)と題した講演を行った。ジンメルは、世界大戦が単なる破壊と殺戮ではなく、フランス革命以来の精神的大変革であり、戦争によって真に価値あるものだけが残ると述べる。

ここ数十年来、ドイツにおける諸々の精神運動はあたかも、遠方からのように、断片的に、ある程度意識的に、新しい人間の理想を目指している。(……) 私がここで問題にするのは、個々の具体的に可能な人間という救世主ではなく、それは、ルソーの「自然人」のような、超特異的な理念である²⁾

ジンメルの言う「新しい人間」の具体像は定かではないが、例えば、ゲオルゲ、シュベングレー、オイケンら、当時多くの知識人らも同様に、世界大戦を契機とする新時代の到来に対する期待は、一般的なものであった。ジンメルによれば、それぞれの具体的な姿の差異は問題ではなく、むしろ「肝要なことは、このような区別ではなく、希望、労働、理想などが普遍的な新しい人間を目指しているということである」³⁾。つまり、このような新しい人間像を目指すことそれ自体が有意義な傾向だということである。そしてここでは「意図的に、合目的的に実現する一定の像が問題なのではなく、固有の労働なくしては完成されない、内部から伸長する生長、有機的な生成が問題となる。というのも、労働は直接的要素として人間の生命過程に帰属し、人間の自己形成の自然力に帰属するからである」⁴⁾と述べ、新しい人間の創出には「労働」(Arbeit)という人間本来の「自然力」が重要な役割を担うことを強調している。

このように、ジンメルにおいては、世界大戦の戦場は単なる破壊の場ではなく、「労働」による「新しい人間」の生成の場としても捉えられていた。ジンメルは「新しい人間」のおぼろげな姿を予感し待望していたが、それはあくまで予感に留まっていた。

一方で前線兵士として、この大戦の最も苛烈な戦いに身を投じたエルンスト・ユンガーは、この「新しい人間」によりはっきりとした輪郭を与えた。世界大戦をジンメル同様に「ニヒリズム」⁵⁾の戦場として体験したユンガーは、「新しい人間」のよりはっきりとした姿を、『労働者』(Der Arbeiter)の中で描きだした⁶⁾。

ユンガーが世界大戦の戦場から導きだした時代状況とはこうだ。すなわち、世界は戦争技術が自動的に戦争を遂行する「総動員」(die Totale Mobilmachung)の時代に突入しており、あらゆるものが戦争に投入され、旧来の世界は徹底的に破壊される。そして、白紙状態となった土壌の中から「労働者」(der Arbeiter)⁷⁾という新人類が出現する。新しい「労働者」の世界では、キリスト教道徳、進歩信仰、啓蒙的理性や個人主義など、これまで西欧市民社会で至高とされてきた諸価値が全く無意味なものになり、その総破壊の後に、新しい人種が現れるという黙示録的な世界像である⁸⁾。このようなユンガーの時代診断はニーチェに倣ったものであり、レーヴィットに言わせれば、ユンガーはまさに、ニーチェを越えて「未来への意志を掲げるニーチェ」⁹⁾であった。

「新しい人間」である「労働者」の極めて特異な点は、キリスト教や進歩信仰とは「別の信仰」をもつことである。「信仰」は20年代のユンガーの著作から『労働者』に至るまで頻繁に用いられたキーワードだが、この言葉は、これまでユンガーとナショナリズムとの関連で主に論じられてきた¹⁰⁾。しかし「信仰」という言葉は、ユンガーの「新しい人間」を説明するうえでの鍵概念であり、単にナショナリズムとの関連でのみ論じられるべきではないだろう。ユンガーは『労働者』でこう述べている。

労働者の際立った特徴は、全く信仰を持たないということではなく、ある別の信仰 (einen anderen Glauben) を持つことにある。労働者のために残されているものは、生活と礼拝が同一であるという偉大な事実の再発見である。—— この事実はずかな辺境や峡谷を除き、我々の世界の人間から失われてしまっているものだ。[SW VIII. S. 166.]

「労働者」は、生活と礼拝が一体であるような「信仰」を持つという。ここで生じる問いは、合理的な機械技術と非合理的な宗教の合一というのは可能なのだろうかということだ。しかし、機械技術の支配する世界で「信仰」なるものが一体何の役に立つというのだろうか。また、ユンガーの「信仰」はキリスト教とはどのような関係にあるのだろうか。そして、そもそも「労働者」とはどのような人間像なのか。

本稿では、ユンガーの「信仰」概念の内実の変化を辿りながら、それが「別の信仰」へと至る過程を明らかにしたいと思う。そして最終的には、「労働者」の「信仰」に基づく共同体の姿を

明らかにしていきたい。そこで、まず第一章では、ユンガーの「信仰」の確立にとって世界大戦がどのような体験であったのかをみていきたい。

1. 世界大戦のニヒリズムと「信仰」の獲得

まずユンガーの宗教的な道のりを明らかにするために、伝記的な事実に触れておきたい¹¹⁾。エルンスト・ユンガーは1895年3月18日にハイデルベルクのプロテスタントの家庭に長男として生まれた。父は典型的な進歩主義者で、宗教というものを全く意に介さない人物であった。そして母はカトリックの家庭に育ってはいたが、家庭内で特に宗教的な教育を施すということもなかった。宗教的側面をみれば、世紀転換期に典型的な「無神論的」ドイツ家庭であるといえよう。では、このように宗教や信仰とはほぼ無縁であった人物が、どのようにして強力な「信仰」を抱くに至ったのだろうか。

ユンガーにとっての決定的な「宗教体験」は第一次世界大戦であった。大戦が勃発し、志願兵として従軍したユンガーは、塹壕戦に適応した精鋭部隊である「特攻隊 (Stoßtrupp)」¹²⁾の隊長として活躍したが、この時の体験が後に決定的な役割を果たすことになる。この特攻隊についてユンガーはこう述べている。「これこそが新しい人間だ。それは、戦う技術者、中欧の精鋭、全く新しい人種、賢明で強靱で意思が固い。」[SW VII. S. 72f.] 機械技術の圧倒的な火力、バタバタと死んでいく戦友、死と苦痛の氾濫、腐乱してガスの吹き出る死体、ユンガーにとって戦場は、まさにニーチェの思想が現実化された場、つまり既存の価値を破壊し、新たなものを生み出す破壊と創造の場であった。

時折、精神の地平の彼方で、倦むことなき者たちの眼を射る星辰が、まるでかつての東方の王のごとく世界変革の予言と前触れの光を放つ。周囲の星々は、燃え盛る灼熱地獄の中で溺れ死に、邪神の偶像は土くれに還る。そして、鑄造されたあらゆる形姿は、再び千の高炉の中で溶かされ、新たな価値へと注がれる。[SW VII. S. 11.]

世界大戦の戦場は、高炉として働き、その中に投入される無数の犠牲者（無名兵士）を鑄直して、新しい人間を生みだす。このような破壊と創造の苛烈な戦場において、ユンガーは旧来の諸価値の崩壊と新しい時代の兆しを見出した。即ち「ニヒリズムの到来を戦場で経験した」¹³⁾のである。

こうして神も仏もいないと思われた戦場は、ユンガーによって単なる死と破壊の場ではなく、宗教性を帯びた神秘的空間として表現される。

チベット仏教のマニ車に埋め尽くされた広野を思わせるこの単調な運動、ピラミッドの幾何学的輪郭に似たこの厳粛な秩序、そしていかなる異端審問もいかなるモロクですらもこれまで要求したことがないようなこの犠牲者、一歩進むごとに恐るべき確実さで増え続けるこの

犠牲者を観察するならば、現実的に見るすべを心得た目の持ち主は、時代の闘争の下に織り成される原因と結果の帳の背後に運命と崇拝が働いている、という洞察を、いかにして回避することができようか。[SW VIII. S. 51f.]

ピラミッドや大聖堂などの壮大な建造物において、また究極の生存本能を揺さぶる戦争において、その表現を見出しうるような大規模の努力、今日ではとかく「意味喪失」と同一視されがちである目的喪失という独特の標識の付着した努力が、我々の前に立ち現れるとして、我々はそれに取り組む際に（……）むしろ礼拝的な次元の現象に我々が直面しているのではないかとまず疑ってみなければならない。[SWXIII. S. 130.]

無数の死者や塹壕を走り回る前線兵士の活動は、ユンガーにとって宗教的な活動として捉えられている。前線兵士の活動は、大聖堂やピラミッドを建設することに等しい「礼拝的な次元の現象」に属するものとみなされる。そしてこのような戦場では人間の運命が二分される。

戦争は我々の父であるばかりか、また息子でもある。我々が戦争を生み、戦争が我々を生んだ。槌で撃たれ、彫り刻まれた我々もまた槌を振るい、鑿をあてがう。鍛冶屋であり、火花を散らす鋼鉄でもある。自己の行為による殉教者であり、機関であり推進力である。（……）世界の謎を解くための最良の道が存在することを我々に信じさせる。我々は超人が現れんとする結晶点に到達したようだ。[SW VII. S. 14.]

ユンガーにとって、第一次世界大戦の戦場は、従来の価値の崩壊をもたらすニヒリズムの空間として現れるが、戦争という神秘的現象は単に破壊するだけでなく、また新しいものを創造する。そして戦場では大多数のものが惨たらしく死んでいく一方で、「鋼鉄のあらし」を乗り越え、前進していく「超人」的性格を帯びた人間の一群が現れた。それは、ユンガーが戦場で目にした「新しい人間」だった。そして、戦争を「新しい人間」の選別の場とみなすことにより、それに付随するおびただしい犠牲は、ピラミッドや大聖堂建設といった大事業の殉教者とみなされ、無意味な消耗品となることを免れる。このように、ユンガーにとって戦争は「聖別」の儀式であり、こうして生じた破壊の現場に人々は遍く編入されていくことになる。

疑いでさえ疑わしくなってしまった、神なき人々の息子、孫、ひ孫である我々は、人生を低温と高温で脅かす風景の中を行進している。個々人と大衆が疲弊すればするほど、少数者だけに与えられた責任はいっそう大きくなる。逃げ道、脇道、退路は全く存在しない。[SW VIII. S. 207.]

ユンガーによれば、このニヒリズムの世界からは何人も逃れることができず、「超人」タイプの限られた少数者、すなわち戦場におけるエリート兵士たちだけがそれを乗り越えていけるのだという。このように、ユンガーはニーチェの黙示録的な時代診断を踏襲しながら、戦場から「超人」が現れると説いたが、その「新しい人間」は戦争という「聖別」に耐えた前線兵士だった。

次章では、「超人的」な前線兵士の「信仰」がどのようなものであるのか、そしてそれがどのように発展していったのかをみていきたい。

2. 「信仰」から「別の信仰」へ

第二章では、ユンガーの政治論文に於ける「信仰」を問題にして、ナショナリズムと結びついた「信仰」概念が、どのように「別の信仰」へと至るのかをみていく。

第一章でも述べたが、ユンガーの戦争体験は同時に宗教体験でもあった。そしてユンガーは戦場で「信仰」を獲得した。その「信仰」は、出発地点からすでに世界大戦の前線体験と深く結びついていたのである。ユンガーは政治論文『表層と深層』(*Oberfläche und Tiefe*) (1929) で以下のように述べている。

我々にとって有限なもの (*Endliches*) とはドイツのことであり、それ故に我々ナショナリストというものも、はたらく軍旗の前で未だ栄誉を失わぬ者たち、我々を動かすものの傍で心を尽くそうとする者たちである。というのも、司祭の祝福の下で一片のパン切れが永遠の血肉へと変わるように、またパンだけではなくその際に信仰もまた変ずるように、我々もまた有限なるものにおいて永遠なるもの (*Ewiges*) を称えることができると信じている。我々は戦場においてこの信仰 (*Glauben*) を抱いたのだ。[PP. *Die Oberfläche und Tiefe*. S. 206.]

表層とはつまり、現象的な世界のことであり、深層とは現象的世界の背後にある永遠の無時間的世界を指している。ショーペンハウアーを思わせる二元的世界観の中では、パンをキリストの肉体に見立てて行われる聖体拝領を例に挙げながら、軍旗やドイツという有限なものに具現化されている永遠なるものが称えられている。この「信仰」は極めてナショナルな性質を帯びているが、「ナショナリズム、この言葉はある集団のひとつではなく、それを信じるもの (*glauben*) 全てを指す」[PP. S. 362.] と、述べているように、ユンガーにとって「信仰」という言葉は、ナショナリズムとほとんど同義であった¹⁴⁾。

我々は当然ながら有限な目標、即ちドイツという名の地上のライヒを約束することしかできないが、にもかかわらずこの目標は、あらゆる激情と信仰を迎え入れるだけの偉大さを十分に備えているのだ。[PP. *Oberfläche und Tiefe*. S. 206.]

ナショナリズム、それはナツィオンの生命力への信仰、人々が誕生以来参与している偉大な運命共同体である。(……) この信仰の激情と意志の決断性によってナツィオンの偉大さは規定される。[PP. *Der Nationalismus*. S. 186.]

このような記述には枚挙に暇がないが、ユンガーにおいて「信仰」はまた共同体をまとめ上げる中心点でもあった。

我々は同じ信仰を持つが故に、我々は同じ血潮がその中を流れ、また同じ運命に対峙する、そのような心の共同体によって結びついている。それゆえに、我々は実際の成功や希望に拠り所を求めることがゆるさるのだ。[PP. *An die Freunde*. S. 361.]

こうして、ユンガーは共通の「信仰」を軸とする共同体の構築を強く主張する。シュヴァルツによれば、「ユンガーはナショナリズムをはっきりと明確に信仰と名付けている」という。つまり、「そのイデオロギーの宗教的性質が彼にとっては決定的な試金石となったのである」¹⁵⁾。さらに、「ユンガーはあらゆる政治的活動を信仰運動の作用としてみなしており、国内の混乱は彼にとって強力な宗教的変革の表現であったのだ」¹⁶⁾。即ち、ユンガーの信仰は「ナツィオンへの信仰」(Glaube an die Nation)¹⁷⁾であり、ユンガーの従事したナショナリズムの政治運動は、宗教的な運動でもあったのである。ではこの宗教的な性格はキリスト教とはどのような関係にあったのだろうか。

シュヴァルツによれば、「ユンガーが当時発表した、多くの論説において、信仰という言葉はナショナルな確信との関係で現れている。それはキリスト教的シンボルとの比較ですらも、全く憚るところがない」¹⁸⁾という。それはまず、ユンガーがキリスト教概念(犠牲(Opfer)、献身(Hingebung)、奉仕(Dienst)、結合(Bindung))を政治論文においても頻繁に用いているという点。次に、ナツィオンを単なる一時的現象以上のものとみなす傾向、すなわち、ナツィオンを「ドイツ的理念」や「ライヒという永遠のユートピア」へと精神化する点である。トラヴニーは、ユンガーが政治的文脈でキリスト教的モチーフを多用するのは、理念に権威を付与し信用性を担保するためであると主張している¹⁹⁾。ユンガーはニーチェに倣ってキリスト教を没落した勢力とみなすが、だからといってキリスト教的な思考までもを放棄したわけではなかったのである²⁰⁾。とはいえ、もちろんそれはキリスト教への接近というよりは、むしろその概念や思考などの外面的な部分の借用だと考えられる。

このように、ユンガーは「信仰」を戦場で獲得したが、それは20年代のユンガーにおいて「ナツィオンへの信仰」として結晶化され、共同体を纏めるための中心となった。

次にユンガーにおけるナショナリズムと技術の関係、即ち「信仰」と技術の関係を明らかにしておきたい。「信仰」と技術、一見矛盾するように見えるふたつのものは、ユンガーにおいては密接に結びついている。むしろ技術は、ユンガーの「信仰」概念の中心点をなしている。

1930年に出版された論集『戦争と戦士』（Krieg und Krieger）には、ユンガー周辺のナショナリストの理論家や作家たち、エルンスト・フォン・ザロモンやエーリッヒ・ミューザムらが寄稿しており、いずれの論文もナショナリズムを肯定する論調である。ユンガーの『総動員』もその例にもれず、世界的な動員を可能にするのは、あくまでドイツ人のみだと主張し、一貫してドイツが世界の支配者にふさわしいという見解を貫いている。ここでは「技術」がドイツを世界の支配者へとたらし強力な「力への意志」とであるとみなされており、技術を如何に効率的に大規模に運用するかが戦争の勝敗を決するという。「総動員」の時代とは以下のような時代である。

戦争の法則が経済にもその他のどんな領域にも適用される。即ち、戦闘員と非戦闘員の区別が最早全く存在しなくなるのである。（……）この種の編入に例外はない。総動員は、独居房に住まう修道士や熱帯の原生林でゴムの木の樹皮に刻み目を入れる黒人に及ぶのと同様に、ゆりかごの中の赤ん坊に、いやそれどころか胎内の赤ん坊にも確実に及ぶ。[SW VIII. S. 154.]

ここでは戦時と平時の区別どころか、前線と銃後の区別、果ては軍人と民間人の区別ですら無くなり、全てが軍事的秩序に取り込まれ、世界は常時戦争状態に突入する。しかし技術を効率的に運用するだけでは総動員は達成されない。ここでも技術とナショナリズムが結び付けられる。ユンガーは、ラーテナウが敗戦間近に「時は迫れり」と題した愛国的な演説を行った一方で、戦後に共和国外相として安穏とそのポストに収まったという変わり身の早さを非難し、ラーテナウによる「ドイツに対する裏切り」かつ「内的分裂」の原因についてこう語る。

ここに非常に明瞭に示されているものは、動員がある人間の技術的能力を自らの支配者に置きながら、彼の信仰の核心に侵入できない様子である。こうした経過は、ユダヤ系知識人において最もよく見て取れるとはいえ、決して彼らにのみ限られるわけではない²¹⁾。

ラーテナウは政治家として技術を巧みに操り、ドイツ帝国の動員に貢献したにもかかわらず、ドイツという根源的な勢力との関係を、つまり「ナツィオンへの信仰」を欠いていたために、技術を完全な形で用いることができないのだという。すなわち技術を「真の意味で」用いる為には、「信仰」が、つまりナショナリズムが必要だというのだ。そして、ドイツが敗北した原因は、この「信仰」に基づく理念を提示できなかったことにこそあるという。

理念の陣地戦ともいうべきものが、終始戦いを特徴づけていたにもかかわらず、ここに信仰に基づいた力がどれだけ欠けていたかということは、すでに受動的で現状維持的なスローガンを見ただけでも明らかだ。このことはドイツ帝国の崩壊の際に一目瞭然のものとなった²²⁾。

ユンガーによれば、ドイツの敗北は、「ナツィオンへの信仰」の欠如のせいだという。「信仰」に基づいて技術を活用し、総動員を真の意味で完遂することが出来れば、つまり進歩信仰を奉じるフランスやイギリスよりもラディカルに遂行することが出来れば、ドイツが勝利を手にしたはずだとユンガーは述べる²³⁾。というのも、

国外の勢力の勝利が決定的になるのは、一民族が全く表面的な存在となってしまう、民族の最後のデーモンが死に絶えてしまったときだけである。そうなってしまったように見えても——そしてこれが我々の信仰なのだが、——ドイツ語は原言語のひとつであり、原言語としてのドイツ語は文明の諸領域、典雅な世界に、太刀打ちできない不信を注ぎ込む。(……)そして兄弟たちよ、もし我々がこの世界とこの世界を動かすものとを、根本において認識するならば、我々は、世界にとっての最高の危険のひとつとして世界に受け取られることを、誇りにしてよいのだ²⁴⁾。

ドイツは他の国よりも悪魔的な要素を内包しているため、技術を「真の意味」で活用し、他国に勝利することができるのだという。しかしながら、「総動員」をドイツという制約の下で理解する限り、ユンガーの試みは「この戦争を、被抑圧状態からのドイツ民族自体の解放に貢献する、私心なき十字軍として描くことによって、この戦争に後光を与えようとするものに他ならなかった」²⁵⁾のだった。即ち、ハーフの言うように、ユンガーはナショナリズムと技術を結びつけた「反動的モダニスト」の一人であるにすぎなかった²⁶⁾。

しかし、ナチズムの政権掌握を前年に控えた1932年に出版された『労働者』では、「信仰」がナショナリズムから離れていく。ユンガーにおいて、ナショナリズム運動と不可分に結びついた「信仰」は一時的なものにすぎなかった²⁷⁾。『労働者』では、世界が「総動員」という運動の下におかれているという認識は同じくしながらも、その運動を積極的に推進する主体は、最早ドイツ人ではなく、「労働者」という無国籍で非ナショナルな類型となる。この点が、『労働者』と『総動員』との間を隔てる点である。このようにドイツという局地的な地域を問題にするのではなく、世界規模の運動の進展を論じたこの書は、「グローバリズム」を問題にした考察という評価を受けてきた²⁸⁾。しかし、前記の「総動員」と決定的に異なるのは、ナショナリズム的側面のみならず、それと結びついた宗教的な側面である。とりわけ「労働者」の「信仰」は、20年代のラディカルな政治論文や『総動員』の「信仰」とは決定的に異なるのである。ではこの場合、技術と信仰の関係はどうなるのだろうか。

『総動員』でドイツを世界の支配者へともたすはずであった技術は、『労働者』においては、「労働者の形態が世界を動員する方法」になる。[SW VIII. S. 160.]「労働者」と技術との関係は、「人間が自らの技術的手段とケンタウロスの密接な関係にある」ことに等しいという。[SW VIII. S. 130.]とは言え、誤解してはならないのは「決して機械人間が存在するのではなく、機械と人間が存在するということである。おそらく、新しい手段と新しい人間像との同時性には、深

い関連性が存する」のである〔SW VIII. S. 164.〕。即ち、新しい手段である技術と新しい人間である「労働者」との間には密接な関係があると述べている。その一方で、「労働空間の外部にある絆の代表者たち、たとえば市民やキリスト教徒やナショナリストたちはいずれも、技術とこうした適合関係をもたない」〔SW VIII. S. 161.〕と述べ、これまでユンガーにおいて技術と解きがたく結びついていたナショナリズムは、技術との結びつきを失う²⁹⁾。

また技術とキリスト教との関係³⁰⁾についても言及しており、技術は「一般的な意味での信仰の破壊者であるとともに、これまで出現した中で最も決定的な反キリスト教的勢力」である。〔SW XIII. S. 165.〕その結果、「ゴシック様式の大聖堂は世界大戦の砲兵によって戦闘地域における単なる照準点とみなされる」ことになってしまう。〔SW VIII. S. 165.〕つまり、総動員という軍事的世界では、宗教的な建築物の神秘性が失われ、それらは純粋な戦略的価値に還元されてしまうのである。また、永遠なるものの象徴として教会を経ることも無意味になる。なぜなら、「キリスト教会を近代技術の手段によって、それゆえ典型的に反キリスト教的な手段によって建てようとする点に、その完全な本能喪失を暴露」しているからである。〔SW VIII. S. 165.〕近代技術はキリスト教とは相容れないものだったのである。というのもユンガーにとっては、技術こそがニーチェの言う「力への意志」の姿だったからである³¹⁾。

こうしてキリスト教もまた、総動員の時代にはロマン主義の領域に押しやられてしまう³²⁾。そればかりか、技術の進歩に人間の未来を託すという進歩信仰もユンガーによって一蹴される。

我々がそこに見出すものは景気を煽る行進感情であり、その曖昧な目標の中には理性と美德についての古い標語が投影されている。これは、救世主の役割を引き受ける認識による、宗教の代用、それもキリスト教の代用である。〔SW VIII. S. 174.〕

「十九世紀本来の人民教会」〔SW VIII. S. 166.〕である進歩信仰もまた、役不足だとみなされる。というのも、このような進歩信仰には、「根源的なもの」(Elementar)、つまり技術の運用に付随する「危険なもの」との関係が欠けているからである。即ち、進歩主義者は、技術の安全で快適な面ばかりをみて、戦争技術のような、技術の破壊的な、しかし同様にまた本質的な側面を忌避しようとするために、それらは無効を宣告される。これが前述の「民族の最後のデーモン」であるが、最早その担い手はドイツ人に限られない。

技術の本質がニヒリスティックなものに見えるのは、技術の襲撃が諸関係の全体に及び、またどんな価値もそれに対抗できないからである。しかしながら、技術がそれ自身では価値を持たずに中立的であるにもかかわらず、何らかのものに仕えているということを密かに示し、それゆえ人を驚嘆させるに違いないのも、まさしくこの事実である。〔SW VIII. S. 172.〕

ユンガーは技術が普遍的な性格を有しており、人種、民族、宗教を問わずにその影響を及ぼし、

技術はどのような空間にも浸入するため、技術を拒否することはほとんど不可能であると述べ、技術的手段に従事する崇高なものに奉仕する感覚を語ることで、技術を精神化したのだった。

こうして、旧来の勢力であるキリスト教、進歩信仰、ナショナリズムは技術との本来的な関係にないために没落を宣告される。しかし、ユンガーに言わせれば、「力への意志」である技術はそれ自体で有意義なものであり、「新しい人間」である「労働者」のみが技術との意味深い関係にあるという。では、この「労働者」の「信仰」とは如何なるものか。

自分の五体で支える旗以外に、旗は存在しない。教義なき信仰、神々なき世界、原則なき知識、この世の力によってまったく支えられない祖国を持つことは可能であろうか。これは、個々人に対して武装の程度を問う、試金石とも言うべき問題である。無名兵士には全く欠けていない。より重要なものは無名の帝国である。その実在について議論する必要は全くない。[SW VIII. S. 100.]

これまで信仰の根本をなしていた「ドイツ」という絶対的な信仰対象がなくなり、「無名の帝国」や「教義なき信仰」が問題となっている。ここでは、ナショナリズムと信仰が決定的な分離を果たしているように見える³³⁾。ユンガーは、対象が未だ見えぬ中でもその「信仰」を維持していけるかが、「労働者」である程度を測る試金石だという。しかし信仰の対象が秘匿される一方で、「信仰」そのものの必要性は更に強調されている。

労働者の際立った特徴は、全く信仰を持たないということではなく、ある別の信仰を持つことにある。労働者のために残されているものは、生活と礼拝が同一であるという偉大な事実の再発見である。[SW VIII. S. 166.]

ここでいう生活と礼拝の一体化や「労働」という言葉は、古代の礼拝的生活やプロテスタンティズムを思わせるが、「労働者は弱体化した信仰でなく、別の信仰を持つ以上、この世俗化段階の区別はここでは単に博物館的価値しか持たない」[SW VIII. S. 219.]ので、これを単にラディカルなプロテスタンティズムとみることはできないだろう。というのも、「別の信仰」は労働を通して神に近づくとか、身を浄めるということを目的にするのではなく、「労働」それ自体が意味深い行為だからである。「労働」は以下のように定義される。

労働者の時代には、労働として理解されないものがまったく存在しえない。労働は拳や思考や振動の律動であり、昼夜の生活であり、学問、愛、芸術、信仰、礼拝、戦争である。労働は原子の振動であり、星辰と太陽系を動かす力である。[SW VIII. S. 72.]

ユンガーの「信仰」はナツィオンという対象を喪失し、その内実は以前よりも不鮮明で掴みどこ

ろのないものとなったように思われる。ユンガーの信仰対象について、ルーゼはこう述べている、「『労働者』は徹頭徹尾信仰の試金石であり、あるいは少なくとも信仰の意志を示している。ユンガーによって明らかにされた側面は、ただ強い心によってのみ耐えられうる。それは黙示録的なヴィジョンであり、不安や疑念が小市民を満たしている一方で、労働者は希望と信頼に満ちているのである。ユンガーは新しい信仰対象を具体的に示さずに信仰を成立させている。彼はよくわからぬ神のための犠牲を要求する。ユンガーがここで示しているのは、空しい終末論と対象なき信仰である」³⁴⁾。「別の信仰」は、このように対象が明示されていないということで、多くの批判を受けてきた。例えば、「労働者」が世に処する態度は、過酷な現状から逃げずに粛々と労働に邁進すべしという「英雄的リアリズム」(Heroische Realismus)の態度であったが、この態度は「英雄的ニヒリズム」(Heroische Nihilismus)に過ぎないという批判をうけた³⁵⁾。即ち、「労働者」の態度は単なる現行秩序の破壊でしかない能動的ニヒリズムではないか、という批判である。

また、レーヴィットはこう述べている、「労働者は「何のために」生きているか、という問いは、ユンガーにとっては、そもそも間違った問いなのだ。というのも、「何故や何のためにという問いはできるだけ立てないで済ます」ことが重要だからである。さらには「内容などには全くお構いなく、望み信じることができること、そのことが重要だからである」。これこそ「インフレーションとヨーロッパ的なものの枯渇」の時代にあっては「労働」の可能な、真の立場なのだ。つまりは「毅然としたニヒリズム」の立場なのだ」³⁶⁾と述べ、ユンガーの英雄的リアリズムを痛烈に批判している。とりわけ、ユンガーの「信仰」に目的や対象が存在しないことについて批判しているが、ユンガーは最初から考えることを放棄してきたのではなく、むしろ世界大戦の戦場でのニヒリズムの自覚以来、「何を信じるのか」或いは「何のために生きるのか」という問いについて考え抜いた末に、「別の信仰」というものに至ったのではなかったか。たしかに当初より、ユンガーは「信仰」という行為そのもののの中に時代を切り切る力を見出していた³⁷⁾。即ち、戦場で「信じる」ことによって結びついた前線兵士たちが、超人的なはたらきでもって現状を突破していったという実体験が信仰形成のベースになっていた。しかし、「労働者」の状態とは、対象などどうでもよい、なくてもよい、あるいは意図的に隠蔽しているというわけではなく、むしろその存在を予感しながらも、その姿を明確には捉えられていない状態にあるのではないだろうか。これは、ユンガーが現状を表すときに、「中間状態」や「作業場の風景」という言葉を用いることから明らかである。

「別の信仰」を信じる「労働者」の態度である「英雄的リアリズム」は、とにかく現状から逃げずに、むしろ死を強いられる状況に意味を見出そうという態度の現れではないだろうか。国のために戦うのではなく、戦うために戦うという思想は、古代ゲルマン人の思想を思わせるが、実際にユンガーは、現状とキリスト教以前の状況との親和性に言及している。

人間の形態が「死によって」空間的・時間的因果論的なあらゆる比較の及ばない、ある新しい秩序に歩み入る、と考えるべきである。このような判断から、我々の祖先の考え方は生まれ

た。それによれば、戦士は死の瞬間にヴァルハラへと導かれるのであるが、彼はそこに魂として迎え入れられるのではなく、むしろ戦場における英雄の肉体がその高度の似姿となるような、光り輝く姿において迎え入れられるのである。[SW VIII. S. 40.]

このように、ユンガーが「労働者」との類縁関係を指摘するのは、古代ゲルマンやギリシアの英雄や戦士である。そもそもすでに述べたように、「労働者」の世界では、神の恩寵を期待して労働に勤しむわけではない。むしろ神なき世界で、神が現れるまでの中間状態を「労働」によって乗り切ることが「労働者」の信仰である。こうしたニヒリズム的状况をのりこえる為に、ユンガーは神がまだ現れていないキリスト教以前の信仰に範を求めたと言えるだろう。

ここでは、神の死んだ時代、かつ技術が猛威を振るう時代に如何に生きていくか（あるいは如何に意味深く生を終えるか）ということが問題になっている。そして、キリスト教が否定されるだけでなく、宗教の代替物としての進歩信仰やナショナリズムもまた決定的に放棄されている。くりかえしになるが、「別の信仰」がどのような信仰なのか、その対象は何かについてユンガーは言明しない。というのも、来るべき「神」の姿はまだ見えないからである。このように強力な信仰心を持ちながらも、信仰対象がまだみえないという状態は、そもそもユンガーの信仰体験が戦場に根ざしていることに由来する。つまり、通例のように、まず確固たる対象や理念があってそれを信じるようになり、そして徐々に強い確信へと至るという信仰の道筋を辿ったのではなく、ユンガーの場合は、まず戦争体験が根底にあったということ、即ち祖国の勝利を「信じて」戦う前線兵士の超人的な活躍を通じて目の当たりにした、強力な「信仰」という行為の実際の威力を知り、その後この強い信仰心の対象を見出そうとするという、いわば倒錯した経過をたどったためである。こうして、ユンガーにおいては、ニヒリズムの時代を乗り切るために、「信じること」と「戦うこと」の二つが重要視される。

このように、死や危険なものが氾濫する総動員の時代、即ち先の見えない破壊と創造の運動の時代には、安全を至高の価値とみなす市民が没落する一方で、市民社会の枠外にいる者たち、すなわち「信仰者、戦士、芸術家、船乗り、狩人、犯罪者」[SW VIII. S. 60.]などはむしろその勢いを増していくという。何故なら、彼らは根源的なもの（＝危険なもの）と結びついている為に、いわば水を得た魚となって総動員の時代を市民に代わって支配するからである。

たとえば戦士にとって戦闘は高度な秩序の中で遂行される出来事であり、詩人にとって悲劇的葛藤は生の意味がとりわけ明瞭に把握されうる状況であり、犯罪者にとって炎上する都市や地震によって荒廃した都市は格好の行動の場である。同様に信仰をもった人間は、より一層広い範囲で意味深い生に参与する。[SW. VIII. S. 54.]

「信仰」の対象がまだ「予感」されるにすぎない状況では、何を指標にして人間の貴賤が決まるのだろうか。次章では、総動員の時代というニヒリズムの時代を乗り切るために、ユンガーが提

示した「新しい人間」の具体的な姿を明らかにしていきたい。

3. 「信仰」の共同体とニヒリズムの克服

機械技術と危険なものが氾濫するニヒリズムの時代を乗り越えるために、ユンガーは「労働者」という人間像を提示した。それはこれまで見てきたように、「信仰」によってまとまったエリート戦士であった。ユンガーは「労働者」についてこう述べる。

我々が例として挙げたものは、物量戦の単調な経過を戦い抜いて、戦闘過程に対する影響力を獲得するエリートや、党機構を突き破る新種の勢力や、あるいは、それらの活動のために生まれる同志的な共同体である。[SW VIII. S. 123.]

「労働者」は、積極的に時代にコミットしていく同志的な関係をもった共同体である。そして、これらの共同体は古い結社の集会とは異なり、「展開」「従士団」「陣営」といった軍事的な性格を帯びているのが特徴である。第一章でも触れたように、このような信仰を基幹とするエリート戦闘集団の発想は、すでに二十年代に書かれた政治論文の中にも表れていた。そしてそれは30年代の前半でも変わっていない。ユンガーにおいては、信仰と戦闘という行為を如何に至高のものとして総合するのかということが問題であった。

労働という言葉が、英雄的価値観とも信仰者の価値観とも矛盾しないように、最高の次元まで高められる（……）ということが可能であること、そしてそれとともに労働者の意義が経済的な勢力や社会的な勢力の意義をはるかに超えることを証明すること、これこそ我々の探究の課題である。[SW VIII. S. 222.]

こうして、技術の時代に適応できない市民に代わって「労働者」が求められる。なぜユンガーがこのように戦士や信仰者にこだわるのか、これはすでに述べたように、ユンガーに宗教体験としての前線体験があったということと、以下の引用のように、これらの人間像が時代に拘束されないという特徴を帯びているためだ。

継続するものは根源的な生とその主題である。しかしそれを書き伝える言葉は絶えず変化し、大いなる劇を繰り返し演じる諸々の役の割り振りが絶えず変化する。英雄（Helden）、信仰者（Gläubigen）、愛に生きるもの（Liebenden）が死に絶えることはない。というのも、彼らはどんな時代にも新たに見出されるからであり、この意味において神話はどんな時代にも聳え立つ。我々が置かれた状態は、幕が下ろされ、その背後で役者と小道具があわただしく入れ替わる幕間に似ている。[SW VIII. S. 98.]

ユンガーはいつの時代にあっても、時代に翻弄されない存在を高く評価する。そして「総動員」という過酷なニヒリズムの時代には、とりわけ、戦士や信仰者の共同体が求められる。というのも、これらの人間像はどんな時代であれ、それを乗り越え存続してきたからである。最終的に、「労働」という行為に総合される英雄的価値と信仰者の価値は「オルデン」(Orden)³⁸⁾として形容されるエリートに体现される。

労働過程の能動的な代表者の数は限られる。我々がここに見るものは、一種の親衛隊、闘争する諸組織の新たな背景の成立である。それはオルデンとも呼びうるエリートである。[SW VIII. S. 118.]

独自の秩序、つまりその中に能動的な類型人が集結し活動するための特別の有機的構成も、すでに生じている。(……) ここではただ、それはオルデンの特徴を帯びていることを示唆しておこう。能動的な類型人を代表する最初の事例の一つが無名兵士である。これはまた、労働の礼拝的な地位を既になんかなり明瞭に示している事例でもある。[SW VIII. S. 157.]

また、ユンガーは「労働」によって世界を変革するという行為を「造形」(Gestaltung) としても捉えており、「労働」を芸術の次元にまで高めている。「労働者」はこの意味である種の芸術家でもあるといえるだろう³⁹⁾。こうして「労働者」が肅々と労働に従事することで生み出される空間は、以下のような様相を呈する。

馬と貴重な武器だけを財産として身に付け、ボロ着を纏った砂漠の民を眺めるのが心地よいように、文明の巨大で高価な兵器庫が修道士が軍人さながらの耐乏生活を送る人々によって支えられ、運営される様子を目にすることもまた良い眺めである。これは男たちを喜ばせる光景であり、また偉大な目標に向けて大変な労苦が費やされるときに繰り返される光景である。ドイツ騎士団やプロイセン軍やイエズス会のような現象が見本であり、そこに認められるべきは、軍人、聖職者、学者、芸術家が耐乏と自然な関係にある、という事実である。このような関係は可能であるばかりか、労働者の形態が世界を動員する作業場風景のただなかでは、むしろ当然でさえある。我々の下では、一人ひとりの成員の血と肉にその技術が息づいているような組織の中に生きることの幸福について、大変よく知られている。[SW VIII S. 215.]

軍人、聖職者、学者、芸術家らの職能集団が一心同体となって「労働」に従事し、大規模な計画を進めることが、労働世界の姿であり、ユンガーは時代に左右されない不変の人間像の中にニヒリズムを克服する可能性を見出した。そしてこの共同体に所属する資格があるかどうかを決定するのは「痛み」(Schmerz) との関係である。次章では、『痛みについて』(1934) における指標

としての痛みの役割を明らかにしていく。

4. 「痛み」による選別

『痛みについて』では、不変の尺度としての痛みを問題としながら、「労働者」における痛みの役割が語られる。ユンガーによれば、総動員の時代の交通は、鉄道、飛行機、大型客船の発達によって便利になった一方で、機械本位の交通規則の出現や大事故における多数の死者が発生する破局の時代でもあるという。

交通事故による犠牲者は年々歳に生じている。その数は血みどろの戦争の犠牲の数に達している。我々は彼らに対して、古い身分のである山男や船乗りに対して抱くような感情を抱く。
[SW VII. S. 180.]

技術の時代には、戦争のない平和な時代においても、技術に由来する多数の死傷者が生じる。ここでは交通と痛みが不可分なものであるとみなされている。さらに、ユンガーは鉱山業において予め事故死者が統計的に試算されるという事態に着目しながらこう述べる。

痛みがこの秩序における不可避の現象のひとつなのだ。(……) 統計とは、人間が確たる貢税を果たす運命にあるということのベールなのである。[SW VII. S. 180.]

統計の背後には無数のむごたらしい死者が存在するはずであるが、それが数値化され覆いを掛けられることで、極めて冷酷に処理されてしまう。ユンガーはまた、交通事故や鉱山業と同様に、自殺者の増大やアウトドアスポーツでの死者というものも技術の時代に「貢税」という形で現れる必然的な結果だという。ここでもまた事象の背後にある神秘的な運命が暗示されている。技術を操る者の死は、統計的な死であり、当然の死、必然的な死となる。技術の時代に生きることは必然的に死や痛みが伴うことになるという。しかしユンガーは痛みを忌避するのではなく、むしろ、戦士や僧侶における痛みとの関係を引き合いに出してこう述べる。

我々は英雄的世界でも、礼拝的世界でも、感傷の世界とは全く別の、痛みとの関係を見出す。(……) ここで生が不断に痛みと接触することに骨折ることで痛みとの特別な関係が生じる。というのも、僧侶的、禁欲的な教義は難行苦行し、肉欲から解脱することに向けられており、戦士的で英雄的な教義は鍛錬することに向けられているからである。[SW VII. S. 159.]

戦士や僧侶は、痛みとの特別な関係にある。即ち、これらの人々において痛みは忌避すべきものではなく、むしろ解脱や鍛錬のために歓迎すべきものである。ユンガーは、古来より痛みに耐え

る術を探索してきた人々に、技術時代を生きていくヒントを求める。そして痛みを忌避するのではなく、これに耐えうるための方法を探る。

まず、その為の方法として、「ユニフォーム」の役割があげられる。「あらゆる時代においてユニフォームは軍事的性格を有していた。それは痛みという攻撃に対して特別な仕方で防備を固めるという要求である。」[SW VII. S. 165.] 人間はこのような画一性、一様性を纏うことで痛みを耐える術を獲得しようとする。「技術は我々のユニフォームである」[SW VII. S. 174.] というように、それは人間が技術的な形態をとって纏まることで耐えがたい痛みを克服する試みである。

礼拝や戦士を組織する際、それは結晶の形成を思わせるような類似性を有しており、この類似性は時折、驚くべき仕方で現れる。例えば、レバント海戦において、トルコ軍の船団は、半月の形で、キリスト教軍の方は十字の陣形を作って攻勢に出たという例がある。[SW VII. S. 166.]

このように「労働者」以前の時代にも歴史的事実として、人間は数学的、幾何学的形態をとることで痛みを克服しようとしてきたという。とりわけ現代では、海戦（Seeschlacht）においてその性格が際立って現れると指摘する。

ここで見受けられるのは、戦士や戦士の集団ではなく、艦船や艦隊である。我々はこのに人間が没落を運命と認める事態に遭遇する。我々が最後に苦心せねばならないのは、この没落を避けることなく、軍艦旗を靡かせながら没落することである。[海戦の] 生還者の報告において読者は何度も奇妙な雰囲気にくわす。そこから推察されることは、死が決定的な瞬間において、全く見られないということである。特に明確にそれが作用しているのは、人間が殲滅の領域の只中において機械装置の操作に仕える場においてである。我々はそので、最高度の安全の状態において死を見出す。人間は死と直に接近するときに安全を感じることで死を意のままにする。[SW VII. S. 176f.]

こうして不思議なことに、人間がほぼ完全に技術的秩序に編入される海戦では、技術の運用に必然的に伴う死や痛みが隠蔽されてしまう。人々はユニフォームを着用し、自身を画一化、数値化することで、死を冷酷に扱おうとするようになるのである、即ち統計的に犠牲を処理し、自身の死を客観化、即物化することで死を克服しようとしたのだ。人間個人の死を統計的に、或いは数学的に処理しようとする事態の一般化と、人間が対象化され、即物化される現象はニヒリズムの時代の特徴として描写される。

我々はまだ、価値の崩壊を感知できる。価値の崩壊とは世の平板化と画一化である。
(……) 我々は、生が力への意志として現れるような演劇の開幕に座しているのではない

か？（……）崇拜の平板化、文化のインポテンツ、取るに足らぬ中庸から導き出せる結論は、我々が最後の、それも大変奇妙なニヒリズムの段階にいるということである。その段階においてこの新しい秩序が既にはるか彼方へと進められているものの、このような秩序にかなった価値がいまだ目に見えないということだ。[SW VII. S. 188f.]

ユンガーによれば、あらゆるものが平板化、画一化する世界は、至高の価値が崩壊した後の状態を指しているという。そしてこのようなニヒリズムの状態で自己を鍛錬し、解脱へと至らせるためには痛みとの特別な関係を築く必要があるという。そして痛みにどれだけ耐えられるかということによって人間の価値が決まる。というのも、「階級の高さと痛みの深さは直接的関係にある」からだ。[SW VII. S. 167.]

人間が置かれている一見矛盾する状況とは、二つのものの併存、即ち、より高度に組織する能力と、価値や内容なき信仰、正当性なき教義への完全な色盲（……）なぜこれほど道具的な時代において、人は国家を包括的な道具とみなさずに、あるカルト的な勢力とみなしたがるのか、つまり、なぜ技術とエトスが不思議な仕方と同じ程度に重要な意義をもつようになったのかということである。このような状況下では、痛みが唯一の指標となる。価値がその地歩を失うところでは、痛みに方向づけられた運動は驚くべき印として存続し続けるのである。[SW VII. S. 190.]

ニヒリズムの状態から新しい時代へと進んでいる状態では、技術とエトスの両方が同程度に重要視される。「価値や内容なき信仰」と高度な科学技術が併存する時代には、不変の尺度である痛みを指標となして、痛みに耐える術を心得た人種である「労働者」は、「総動員」の行われる過酷な時代であっても生き残っていくのである。

以上のように、ユンガーが世界大戦の戦場において、機械技術の猛威と破壊という形で体験したニヒリズムの到来は、「信仰」を核として緊密に連帯する共同体によって克服することが試みられた。この「信仰」は当初、一時的にナショナリズムと結びつき、「ナツィオンへの信仰」という形をとっていたが、『労働者』以降はナショナリズムから放れ、未だ「教義なき信仰」へ、未だ対象の判然としない信仰へ、即ち「別の信仰」へと変化した。「別の信仰」とは、神なき時代を「労働」に邁進することで乗り切ろうとするものであったが、この担い手が「労働者」という新人類であった。「労働者」もまた「別の信仰」によって結びつくが、その形態はオルデンの性格を帯びる。即ち単なる信仰者の共同体ではなく、軍事的な性格を帯びた共同体の形をとるのだ。というのも、世界が軍事技術の支配する「総動員」の時代になったからである。ユンガーは時代に翻弄されずに、いつの時代でも禁欲的に厳格に生を送る人々にニヒリズムの時代を乗り切る可能性を見出す。それが、戦士、聖職者、芸術家などであり、彼らがオルデン的な形式でまとまる共同体を構想したのである。そして、いわば戦士であり信仰者でもある「労働者」が、一心

同体となって「労働」に従事することでニヒリズムを乗り越えようとしたのだった。「労働者」であるか否かを判別する試金石もまた、「痛み」という不変の尺度であった。こうして、ユンガーの「信仰」は、内実を変化させながらも、ニヒリズムの時代を乗り越える共同体の中核としての役割を果たしてきたということが分かった。しかし、ユンガーは「未だ見ることができない」この信仰の対象を、後に見出すことができたのだろうか。そして、この信仰を基幹とする「新しい人間」が、後の著作においてどのように発展していったのか。さらには、技術で武装した、戦士と信仰者によるニヒリズムの克服というテーマはユンガーにおいてどのように変遷していったのだろうか。これは今後の課題としたい。

エルンスト・ユンガーのテキストは以下を使用した。

Jünger, Ernst: *Sämtliche Werke. Werkausgabe in 22 Bänden*. Stuttgart 1978-2003. 引用の際は SW の略号を付し、巻号をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記した。

Jünger, Ernst: *Politische Publizistik. 1919 bis 1933*. Hrsg. von Sven Olaf Berggötz. Stuttgart 2001. 引用の際は PP の略号を付し、巻号をローマ数字で、論文名をイタリック体で、頁数をアラビア数字で表記した。

なお、引用にあたっては、川合全弘訳『追悼の政治』、月曜社、2005年、および、『労働者——支配と形態』、月曜者、2013年を参照した。

註

- 1) 「新しい人間」言説の通史的把握には以下を参照せよ。Küenzlen, Gottfried: *Der neue Mensch: eine Untersuchung zur säkularen Religionsgeschichte der Moderne*. München 1994. S. 57-62. S. 136. また、第一次世界大戦における「新しい人間」言説について以下に詳しい。Horn, Eva: *Krieg und Krise. Zur anthropologischen Figur des Ersten Weltkrieges*. In: Graevenitz, Gerhart von (Hg.): *Konzepte der Moderne*. DFG-Symposium 1997. Stuttgart/Weimar 1999, S. 636-656.
- 2) Simmel, Georg: *Der Krieg und die geistigen Entscheidungen. Reden und Aufsätze*. München/Leipzig 1917. S. 26ff.
- 3) A.a.O., S. 27.
- 4) A.a.O., S. 28.
- 5) Gawoll, von Hans-Jürgen: *Nihilismus und Metaphysik. Entwicklungsgeschichte Untersuchung vom deutschen Idealismus bis zu Heidegger*. Bad Cannstatt 1989, S. 233-243.
- 6) これまでの研究において、『労働者』は主に六つの視点から考察が行われてきた。一つ目は、市民の時代の没落と新時代の幕開けという歴史哲学的、黙示録的な側面 [Dietka 2016, Wirczek 1999]。二つ目が、「労働者の形態」という形而上学に関するもの [Heidegger 2004, Trawny 2009]。三つ目が、政治的マニフェストとしての『労働者』 [Breuer 1993, Sontheimer 1992, Prümm 1976, Mohler 1950, Niekisch 1935]。四つ目が、「総動員」概念を社会理論や技術論の文脈で論じたもの [Emmerich/Wege 1995]。五つ目が、モデルネを美的な芸術として把握しようという芸術論的視点 [Koslowski 1991]。そして最後が、文学と政治が顕密に結びついた美的エッセイという側面 [Ketelsen 1994]。

(詳しくは以下を参照：Matthias Schöning (Hg.): *Ernst Jünger-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart, Weimar 2014, S. 105–116.) 本稿では『労働者』の黙示録的な面に焦点を当て、「新しい人間」である「労働者」と「信仰」の関わりを明らかにしていく。

- 7) ユンガーの *Arbeiter* という語には、これまで「労働人」[今村 1978、蔭山 1986] や「労働者」[川合 2013] が当てられてきたが、本稿では、*Arbeite* の一般的な訳語である「労働者」を採用した。
- 8) このような黙示録的世界観については、ジンメル同様にユンガーにおいても、ニーチェの超人思想の多大な影響があることは既に早くから指摘されてきた。ユンガーにおけるニーチェ受容やニーチェからの影響については以下を参照せよ。(Wilczek, Reinhard: *Nihilistische Lektüre des Zeitalters. Ernst Jüngers Nietzsche-Rezeption*. Trier 1999.) ヴィルチェックによれば、ユンガーのニーチェ受容は三段階に分かれており、『労働者』はこの第二期：新しい人間類型によるニヒリズムの克服の段階にあたる。その他、ゾンによれば、ユンガーはニーチェの意志の形而上学を用いて、戦争を意志のフォルムと表現しており、ユンガーの戦争観もまた決定的にニーチェの影響圏にあるとされる。(Sonn, Werner: *Der Mensch im Arbeitszeitalter. Das Werk E. Jüngers als Auseinandersetzung mit dem Nihilismus*. Saarland 1971, S. 12–18.)
- 9) Löwith, Karl: *Karl Löwith Sämtliche Schriften II. Der europäische Nihilismus. Betrachtungen zur geistigen Vorgeschichte des europäischen Krieger*. Stuttgart 1983, S. 520. (レーヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』、三島憲一訳、岩波書店、2016、376 頁。)
- 10) ルーゼ [Loose 1958] やシュヴァルツ [Peter-Schwarz 1962] をはじめ、トラヴニー [Trawny 2009] も同様の見解である。これについては、第二章で詳しく述べる。
- 11) ユンガーの伝記的事実については、主として Schwillk, Heimo: *Ernst Jünger. Ein Jahrhundertleben*. Stuttgart 2014. および、Kiesel, Helmuth: *Ernst Jünger. Die Biographie*. München 2009. を参照した。
- 12) 特攻隊 *Stoßtrupp* とは、敵陣に突破口を開く少数の精鋭部隊のことである。ユンガーはこの特攻隊の隊長であった。また、『鋼鉄のあらし』初版の副題にも「特攻隊」の文言が採用されている。ユンガーは特攻隊という組織を、一般の前線兵士とは異なる精鋭集団だと考えていた。
- 13) Wilczek, Reinhard: *Nihilistische Lektüre des Zeitalters. Ernst Jüngers Nietzsche Rezeption*. Trier 1999, S. 30.
- 14) ナショナリズムを信仰と結びつけることは、ユンガーの専売特許というわけではなかった。例えば、ヘルムート・フランケが「ナショナリズムはこの世の宗教だ」(Franke, Helmut: *Was ist der Neue Nationalismus?* in: Arminius. Berlin 1926.) と述べている他、ハンス・ギュンターもユンガー同様に、ナショナリズムを信仰と同一視していた。(Sontheimer, Kurt: *Thomas Mann und die Deutschen*, Frankfurt a.M. 1965, S. 55ff.) また『ドイツへの信仰』を著したハンス・ツェーヴァーラインなどもその典型であろう。(Zöberlein, Hans: *Der Glaube an Deutschland. Ein Kriegserleben von Verdun bis zum Umsturz*. München 1934.)
- 15) Schwarz, Hans-Peter: *Der konservative Anarchist. Politik und Zeitkritik Ernst Jüngers*. Freiburg 1962, S. 63.
- 16) A.a.O., S. 64.
- 17) A.a.O., S. 64.
- 18) A.a.O., S. 63.
- 19) Trawny, Peter: *Die Autorität des Zeugen. Ernst Jünegers Politische Werk*. Berlin 2009, S. 21.
- 20) ヴァイマル期ユンガーのキリスト教的思考については以下を参照せよ。野上俊彦「初期ユンガーにおけるキリスト教的思考」、『ドイツ文学論攷』第五十五号、二〇一四年、二九–五〇頁。野上はユンガーとキリスト教の問題は、単純にユンガーを反キリスト者と規定して済ますことのできない問題で

あると述べ、『労働者』における「別の信仰」に、ユンガーがキリスト者として精神的に独立しようとする萌芽をみている。野上はとりわけ、初期ユンガーにおけるベルナノスの影響を指摘している。

- 21) Jünger, Ernst: *Die Totale Mobilmachung*. In: *Krieg und Krieger*. Hrsg. von Ernst Jünger. Berlin 1930, S. 24. 全集版においてはラーテナウに関する箇所が削除されている。
- 22) A. a. O., S. 25.
- 23) ユンガーが、ラーテナウをドイツに対する裏切り者と見なしていたことは、ラーテナウの高度な政治戦略を見ぬけなかったことに因るユンガーの誤解であった。ラーテナウの伝記的事実については以下を参照。(Christian Schölzel: *Walther Rathenau*. Paderborn 2006.)『総動員』のこの箇所は、ユンガーの反ユダヤ主義言説としてよく言及される。例えば、以下を参照。Kiesel, Helmuth: *Ernst Jünger. Die Biographie*. München 2009. S. 309-317.
- 24) Jünger, Ernst: *Die Totale Mobilmachung*. In: *Krieg und Krieger*. Hrsg. von Ernst Jünger. Berlin 1930, S. 26.
- 25) A. a. O., S. 22.
- 26) ハーフは、ナチズムを、アドルフ・ヒトラーの言う「野蛮に頹落した啓蒙」としてではなく、むしろドイツにおいて近代化が不徹底であったために生じた現象とみなしている。そして近代化に伴うはずの議会主義や自由主義を否定し、テクノロジーとナショナリズムを結びつけ、ナチス登場の露払いを行った「反動的モダニスト」の一人としてユンガーを挙げている。
Herf, Jeffrey: *Reactionary modernism. technology, culture, and politics in Weimar and the Third Reich*. Cambridge 1984.
(ハーフ『保守革命とモダニズム ―― ワイマル・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』、中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳、岩波書店、1991年)。
- 27) 「長期間にわたって書き継がれたユンガーの作品全体から振り返ってみると、初期のナショナリズム思想は、近代のカオスにおける緊急避難所として、あるいは絶滅地帯に置かれた軍人たちが彼ら相互のきずなの中に見出した最後の救済の夢として、位置付けられるものなのかもしれない。」(エルンスト・ユンガー『ユンガー政治評論選』、川合全弘訳、「第一部解題 ―― エルンスト・ユンガーにおける追悼論の変遷」、月曜者、2016、200頁。)
- 28) ただしトラヴニーによれば、『労働者』は出版当初、徹頭徹尾権力闘争の指南書であり綱領でもあったはずだが、ユンガー自身が後年の作品において意図的に『労働者』の惑星的次元や時代診断的要素を全面に出したことにより、ナショナルで政治的な側面が隠蔽されたのだという。(Trawny, Peter: *Die Autorität des Zeugen. Ernst Jüngers Politisches Werk*. Berlin 2009, S. 14.)
- 29) 1930年ごろから、ユンガーはナショナリズムから距離をとり始めるが、キーゼルはここに、ユンガーの師であるフーゴ・フィッシャーの影響を指摘している。Kiesel, Helmuth: *Ernst Jünger. Die Biographie*. München 2009. S. 303.
- 30) キリスト教の中にもジャック・エリュールのように技術を悪魔的な力として拒否する立場や、科学と技術を有神論的に基礎づけようとするエフベルト・スフルマンらの立場がある。キリスト教と技術の関係については、以下を参照。(David Hawkin: *Christ and Modernity: Christian Self-Understanding in a Technological Age*, Ontario 1986.)
- 31) 「労働者」を世界の支配者の地位へともたらず「総動員」の具体的な方法として、「力への意志」は技術という形で現れる。[SW VIII. S. 74-83.]
- 32) ユンガーのキリスト教批判について、ヴァスナーによれば、「『労働者』を読んだものであれば、そこにユンガーの反動的性格と結びついた、伝統的宗教への破壊宣告を見出すだろう。この宣告は、ユンガーにとって、キリスト教が見かけ上は時代遅れに見えたことと、キリスト教が個人的状態や欠乏状

態を土台としているとみなしたことに起因するのである。」(Waßner, Rainer: *Die letzte Instanz. Religion und Transzendenz in Ernst Jüngers Frühwerk*. Nordhausen 2015, S. 130.)

- 33) ただし、『労働者』の草稿を研究したトラヴニーによれば、当初『労働者』は『総動員』同様に極めてナショナリスティックな性格をおびていたというのである。たとえば、労働者の第四節には、「労働者の上昇とドイツの上昇とが同義であること、これが我々の信仰である。」[SW XIII. S. 31.] というような、これまでのナショナリストユンガーを思わせる記述が残滓のように残っている。労働者はこのように、これまでのナショナリズム信仰と「教義なき信仰」の同居する書であり、ナショナリズムを否定しつつもそこから離れられないというユンガーの折衷的態度を示すものでもある。(Trawny, Peter: *Die Autorität des Zeugen. Ernst Jüngers Politisches Werk*. Berlin 2009, S. 27.)
- 34) Loose, Gerhard: *Ernst Junger. Gestalt und Werk*. Frankfurt am Main 1957, S. 105.
- 35) Matin, Alfred von: *Der Heroische Nihilismus und seine Überwindung. Ernst Jüngers Weg durch die Krise*. Krefeld 1948.
- 36) Löwith, Karl: *Karl Löwith Sämtliche Schriften II. Der europäische Nihilismus. Betrachtungen zur geistigen Vorgeschichte des europäischen Krieger*. Stuttgart 1983, S. 520. (レーヴィット、カール『ヘーゲルからニーチェへ』、三島憲一訳、岩波書店、2016、380頁。) 第二版では、ユンガーに関する箇所は削除されている。
- 37) 「信仰の価値はその対象にあるのではない。信仰の価値はその集中力 (Intensität)、顕密さ (Innigkeit)、そして突破力 (Durchschlagkraft) そのものにあるのだ。」[SW VIII. *Gross-Stadt und Land*. S. 230.]
- 38) オルデンとは、ドイツ語でカトリックの僧侶団や騎士団のような信仰によって団結した集団を指す言葉である。「勲章」という意味もある。
- 39) SW VIII. S. 217-226.